平成31年3月1日運行開始　4代目ケーブルカー（詳細は6・7ページ）

霊宝館だより

題字・畠野光義師

霊宝館だより　第130号
平成31年4月13日発行
和歌山県伊都郡高野町高野山306
公益財団法人高野山文化財保存会
高野山霊宝館
電話0736－56－2029
URL http://www.reihokan.or.jp

利用案内

開館時間
■11月1日～4月30日　8時30分～17時00分
■5月1日～10月31日　8時30分～17時30分
■休館日　年末年始のみ

■拝観料　大人　600円
高・大学生　350円
小・中学生　250円
高野町に住民票がある方、高野町内の学校に在籍する学生の方は入館無料です。
■専用駐車場あり

第130号　目次

企画展のご案内……2～3
収蔵品の紹介102……4
高野山の文書（十七）……5
特集 高野山ケーブルカー車両入替後編……6～7
高野山の考古学（二十一）……8～9
古絵図で巡る高野山探訪（その十）……10～11
高野山霊宝館からのご案内……12

2019年度 春期企画展
「高野山と不思議な話」
4月20日（土）～7月15日（月・祝）まで

毎月21日（弘法大師の日）ご来館の方にプレゼントあり！　ホームページ割引券もご利用ください

2019年度 春期企画展

「高野山と不思議な話」

国宝　伝船中湧現観音像
平安時代　竜光院【前期】
嵐から空海を助けた観音菩薩

重文　弘法大師丹生高野両明神像（問答講本尊）
鎌倉時代　金剛峯寺【後期】
僧侶の論議、問答講のご本尊

重文　厨子入倶利伽羅竜剣
平安～南北朝時代　竜光院
空海が祈雨の修法に用いたとされる剣

2019年4月20日(土)～7月15日(月)(祝)まで

前期　4月20日(土)～6月2日(日)
後期　6月4日(火)～7月15日(月)(祝)
会期中無休

※高野山霊宝館開館記念日ならびに国際博物館の日に協賛し、5月15日(水)を無料開館日とします。

高野山を開創した弘法大師空海は、非常に多くの伝承が全国各地に残されており、これほど多くの伝承が残っている人物は日本でも稀だといえます。また、高野山は千二百年も前から、霊場として信仰されており、こちらも多くの伝承が残っています。今回の展覧会では、空海に関わる伝承や、高野山に伝えられてきた不思議な話とそれにまつわる文化財を中心に紹介します。この展覧会を通じて、ちょっと違った視点で高野山を堪能してみませんか？

主な展示品

絵画

国宝	伝船中湧現観音像	竜光院〔前期〕
重文	弘法大師丹生高野両明神像（問答講本尊）	金剛峯寺〔後期〕
重文	高野大師行状図画	地蔵院
未指定	高野山内絵図（御公儀差上一山図）	金剛峯寺
未指定	稚児大師像	正智院

重文　高野大師行状図画　巻１　江戸時代　地蔵院

稚児大師像　室町時代　正智院

重文　高野大師行状図画　巻４　南北朝時代　地蔵院

未指定　入定弘法大師像　金剛峯寺
未指定　四社明神像（元寇に赴く図）　金剛峯寺
未指定　善女竜王像　竜光院
未指定　宗論御影写　金剛峯寺
未指定　投華―密教に入る―図屏風（高山辰雄筆）　金剛峯寺
未指定　僧形八幡神像（高雄御相互御影）　金剛峯寺
未指定　太元帥明王像　金剛峯寺

■彫刻

未指定　浪切不動尊像（複製）　霊宝館

■書跡

国宝　宝簡集・続宝簡集・又続宝簡集　金剛峯寺
未指定　関白秀次公直筆短冊　金剛峯寺

■工芸

重文　厨子入倶利伽羅竜剣　竜光院
未指定　鉄弓・鉄矢　有志八幡講

◎文化財の状況により、やむをえず変更する場合があります。

※ミュージアムトーク

（学芸員による展示解説）

5月25日(土)、6月22日(土)
いずれも13時30分より　約1時間
予約不要、参加費無料（要拝観料）

※ミュージアム法話

（お坊さんによる法話と展示解説）

5月11日(土)、6月8日(土)、7月6日(土)
いずれも13時より　約45分間
予約不要、参加費無料（要拝観料）

収蔵品の紹介 102

重文 不動明王立像（合体不動）一躯

木造　平安時代後期～鎌倉時代（十二～十三世紀）

金剛峯寺蔵　像高二六八・八cm

お坊さんと神様が造った、高野山を守護する仏像

持物の剣と索は近年の後補です。

解体修理の際に撮影されたもの。昭和四十一年（一九六六）修理完了。貞享三年（一六八六）にも修理が行われたという記録があります。

今回紹介するのは霊宝館新館に常設展示されている不動明王立像です。台座も含めると三メートルを超える巨像で、束ねた髪が左肩で渦巻き、どっしりした太い腰を少しひねり、安定感と静かな威圧感を漂わせています。高野町役場の北、鶯谷地区へ向かう峠付近に明治時代まであった「合体不動堂」の元本尊であるこの像には「不思議な話」が伝わっています。

江戸時代の文献『紀伊続風土記』や『紀伊国名所図会』などによると、弘法大師空海、あるいは化千上人（生没年不明、嘉禎年間〔一二三五～三八〕に千手院観音堂本尊を再造したとされる僧）が、伽藍の鬼門（北東）を守護するために仏像を造ろうと考えていたところ、春日明神から「あなたが半身を造れば、私がその半身を造ろう」というお告げがありました。お互いが造った半分ずつの不動像を合わせてみると、ぴったりくっついた、とされ、そこから「合体不動」と呼ばれているとあります。本像は檜材の寄木造で、頭部を含む胴体は右半分・左半分・背面の三つのパーツに分かれており、後頭部や腕は別材です。中は空洞で解体修理中の写真を見るとかなり薄く、見た目より随分軽そうです。鎌倉時代に東大寺大仏殿の如意輪観音像と虚空蔵菩薩像は異なる仏師が半身ずつ造って合わせた、という記録があり、本像の伝説は実際の制作過程から生じたのか、逆に時間の経過で継ぎ目が露わになった頃に生まれた伝説なのかもしれません。

大きく開いた両目は玉眼（水晶の板を入れる技法）を施さず、量感たっぷりの造像など平安時代の特徴も見られますが、鎌倉時代に古風に造られたという説や化千上人の活躍時期も考えると制作年代の推定は難しいところです。合体不動堂には本像と同時期の作とみられ、ほぼ同じ大きさの地蔵菩薩立像も安置されていましたが（現在は千手院観音堂に安置）、地蔵像については古くからほとんど言及は無く、この点も不思議です。（福形安希子）

こうやくんの豆知識　「春日明神」ってどんな神様？

「春日明神」は春日神社の主祭神であり、「春日権現」「春日神」とも呼ばれます。

春日神社は奈良市にある春日大社を総本社とし、全国に一〇〇〇社以上あるといわれています。

春日明神は、古くは「建御雷之男神」『古事記』と呼ばれる雷の神様でした。鹿島神宮（茨城県鹿嶋市）から白い神鹿に乗って春日大社に勧請されたため、多くの春日明神は鹿とともに描かれています。

真言密教の信仰は神仏融合の思想に基づいています。そのため高野山に連綿と伝わる信仰唱導の多くは地主神である丹生高野両明神の信仰に深く根ざしています。しかし、春日明神に関する伝承はほとんどみられません。合体不動の信仰にだけ春日明神が登場することは高野山の不思議な謎のひとつとされています。

高野山の文書（十七）

「光明院院宣」―汗を流す仏さま―

血の涙を流すマリア像やキリスト像など、世界では不思議な像の話が多く知られています。高野山でも奥之院の「汗かき地蔵」が知られており、いつも汗をかいている姿から、世の人々の苦しみを身代わりに受けていると伝えられています。今回紹介する「光明院院宣」も、南北朝時代（一三三六～九二）に、高野山大塔の五仏が汗を流したという不思議な話に触れた文書です。

「光明院院宣」（国宝『宝簡集』巻41所収　金剛峯寺蔵）

〔翻刻文〕

高野山大塔五仏
汗流出事泰助
法印注進状経　奏
聞返献之殊所被
驚思食也任先例
可致精祈之由可令
下知給旨
御気色所候也仍
執達如件
二月八日　按察使資明奉
謹上　東寺長者僧正御房

文書の内容に入る前に「院宣」について少し説明しておきましょう。院宣は天皇を退位した上皇や法皇が発給する文書で、奉書と呼ばれる形式の一つです。文書の出し手が意思を直接伝える直状とは異なり、奉書は上位の権力者の意思を側近が受けて、その意思を相手に伝える形式の文書です。権力者の地位によってその名称は変化し、綸旨（天皇）、院宣（上皇・法皇）、令旨（皇太子・親王など）、御教書（公卿など）といった種類があります。ちなみに、その意思を受けた側近を奉者と呼びます。今回の院宣では、光明上皇（一三二二～八〇）の意思を、按察使（複数の国を管理する監察官の職）の柳原資明（一二九七～一三五三）が受けて、奉者として東寺長者僧正御房の賢俊（一二九九～一三五七）に文書を出したということになります。宛所が東寺長者の賢俊なのは、東寺長者が金剛峯寺座主を兼ねていたからでしょう。

では、次に文書の内容を見てみましょう。「高野山大塔の五仏が汗を流しているとのこと、高野山の泰助法印からの注進状は、光明上皇に奏上したので返却いたします。特に驚かれて、先例に任せて祈祷するように高野山に命じるようとの、上皇のご意向ですのでお伝えいたします。観応元年（一三五〇）二月八日、按察使柳原資明がうけたまわり、謹んで東寺長者僧正御房賢俊にお送りします。」汗を流した大塔の五仏は、胎蔵界の大日如来と金剛界の四仏、阿閦如来・宝生如来・阿弥陀如来・不空成就如来の五仏を指します。これら五仏は密教世界を描く曼荼羅の中心の如来です。そのような大事な仏さまが汗を流したのですから、泰助法印が急ぎ報告し、光明上皇が驚いて院宣を出したのも無理もないことでしょう。その後この院宣は、東寺より高野山へと送られました。

さて、この院宣に対して高野山はどう対処したのでしょうか。文明十五年（一四八三）に作成された「金剛峯寺年預櫃寺役帳目録」（国宝『続宝簡集』五十五所収）には「大塔五仏汗祈仁王会」の請定（法会に召集する文書）が何点か見受けられます。目録なので、請定の内容は不明ですが、高野山は仁王会を執り行ったことが推察されます。仁王会は鎮護国家、天下泰平を祈願する法会です。大塔の五仏が「汗を流す」ということは、「国家の一大事」として当時の人はとらえていたのでしょう。

仏さまが汗を流す話は、他の寺院でも類例が見られ、中には涙を流す仏さまもあります。現代の視点で考えると、「結露」が原因と考えられますが、昔の人々にとってはさぞかし不思議な出来事だったでしょう。

（研谷　昌志）

特集 高野山ケーブルカー 車両入替（後編）

昭和五年（一九三〇）に開通した、極楽橋駅～高野山駅間を運行する高野山ケーブルカー。八七五mの距離（高低差三二八m）を約五分で上ります。

後編では平成三十年十二月七日に行われた高野山駅でのケーブルカー入替作業と、平成三十一年三月一日より運行を開始した四代目ケーブルカーをご紹介します。

高野山駅 ケーブルカー入替

旧車両搬出

法会のようす

54年にわたって運行した3代目車両を労（ねぎら）う法会が、金剛峯寺の僧侶により営（いとな）まれました。

撮影　田中和義

このあと車両は大型トラックに乗せて運ばれました。

高野山駅のホームに下ろす際には、慎重に作業が進められました。

新車両搬入

多くの関係者や報道陣が見守る中、クレーンで吊り上げられる新型車両。シートに被われた状態での搬入作業で、車両のお披露目は3月の運行開始時です。

新型車両
4代目ケーブルカー

新型車両はスイス製のスタイリッシュなデザインです。３月２日に運行開始記念セレモニーが開催され、金剛峯寺僧侶による運行安全祈願が行われました。天空の聖地へと誘う新しい足に期待です。

車内、乗務員室の機械類は日本ケーブル社製です。

内部は木材を使用し、落ち着いた雰囲気となっています。扉が大きくなり、車いすの方や大きな荷物をお持ちの旅行者が乗降しやすいよう工夫されています。

写真奥、窓の向こうに高野山駅のケーブルカーの運転室が見えます。

不動坂より。窓が大きくなり、高野山の四季の風景や、すれ違う車両が見やすくなっています。

前号で特集した巻上機（ケーブルカーの動力部分）も一新されました。

４代目高野山ケーブルカー　概要

平成31年（2019）３月１日 運行開始
製造：日本ケーブル株式会社
　　※ 客車部分はスイスの CWA 社製
全長：約14m
定員：211人（当初予定より増数）

「期待感」「癒やし・調和」「安全・安心」をコンセプトとしたデザインで、根本大塔をイメージした朱色が鮮やかです。

このN12・N22車両は車体にオレンジのラインが施されています。（表紙の N11・N21車両は白です）

高野山の考古学（二十一）

石塔の銘文を読む③

公益財団法人 元興寺文化財研究所
狭川 真一

今回は同一人物が勧進して建立した石塔を紹介します。いずれも現在は霊宝館に保管されているものです。

願阿、五輪塔を建てる

奥之院の御廟橋を渡ってすぐ右手奥で発見された五輪塔地輪の一面に、「一千日廿五三昧／結衆二万五千人／「ア」／永仁三季十一月日／佛子願阿敬白」（／は改行、「」は梵字）と彫られています（図1）。

地輪は砂岩製で、大きさは横幅三九センチ、高さ二九．五センチを測ります。永仁三年（一二九五）に願阿という人物が先頭に立って行った、一千日に及ぶ廿五三昧の結願を記念しての造塔と推定できます。

その廿五三昧とは、二十五人の僧侶で始められた念仏講で、毎月十五日午後二時から翌朝七時までの間、起請文を読み、法華経や念仏を唱えるというものです。もしその講のメンバーに死期が近づくと極楽往生を願って様々な扶助を行うことを約束していたのです。これは平安時代の寛和二年（九八六）に比叡山横川の首楞厳院で結成されたと言われています（奥村二〇一四）。その後各地へ広がりここ高野山でも実施されたことが理解できます。この銘文では、それに集まった人々は二万五千人に及ぶと記載していますが、二十五人で千日間実施したことから延べ人数を記載したものとみることもできます。なお、この念仏は葬場で行われることが多かったため、墓地をあらわす言葉となり、それが五三昧と略され、さらに省略されて三昧が墓地を示すようになったと言われています（川勝一九七八）。

同じ願阿の銘文がある五輪塔の火輪も存在します（図2）。銘文は火輪の軒裏面の一辺に寄せて記載され、文字を記載する部分だけ丁寧に削ってから文字を刻んでいます。「一千日参詣願阿」という短い一文です。この火輪は砂岩製で、軒幅三八．四センチ、高さ二二．八センチを測る大きさで、火輪裏面中央に直径一五センチ、深さ二．八センチの枘穴がありますので、これと組み合った水輪の上部には納骨用の孔が穿たれていたものと思われます。様式やサイズからみて上記の永仁三年銘五輪塔地輪と組み合っても問題はないと思います。ただ発見された地点は、三〇メートルほど離れた燈籠堂に向かって左手の玉川畔ですので、最初にこの資料を報告された愛甲昇寛さんは、一具のものと見なすには慎重なご意見を提示されています（愛甲一九七八）。

願阿、宝篋印塔を建てる

五輪塔を建立した永仁三年から四年後の永仁七年（一二九九）に、願阿は宝篋印塔も建立しています（図3）。まずは銘文を見てみましょう。

「一千日別時念佛／結縁衆尼乗臺／

幷一百二十人／永仁七年十一月十三日／勧進佛子願阿」とあります。ここで願阿は「勧進佛子」と名乗っていますので、勧進僧だったことがわかります。勧進とは仏教的な作善を行うために資金を集める行為で、中世の頃は何かの事業を起こす時にその寺の僧や近い関係の僧が勧進僧となったようです（川勝一九七八）。つまりこの塔の造立背景として、乗臺という尼僧を代表とする百二十人が結縁し、一千日に及ぶ別時念仏と称する作善業を達成した記念に、その中心となっていた願阿が勧進して、宝篋印塔を造立したと読み取れます。

この宝篋印塔の基礎は、横幅が四二．五センチ、高さが三三センチを測り、上面を二段にしていて、それを含めた高さは三五．四センチですから、推定される塔の高さは一．五メートル以上という大きなものです。願阿の力量がうかがえます。

図１　願阿銘の五輪塔地輪　拓影及び写真

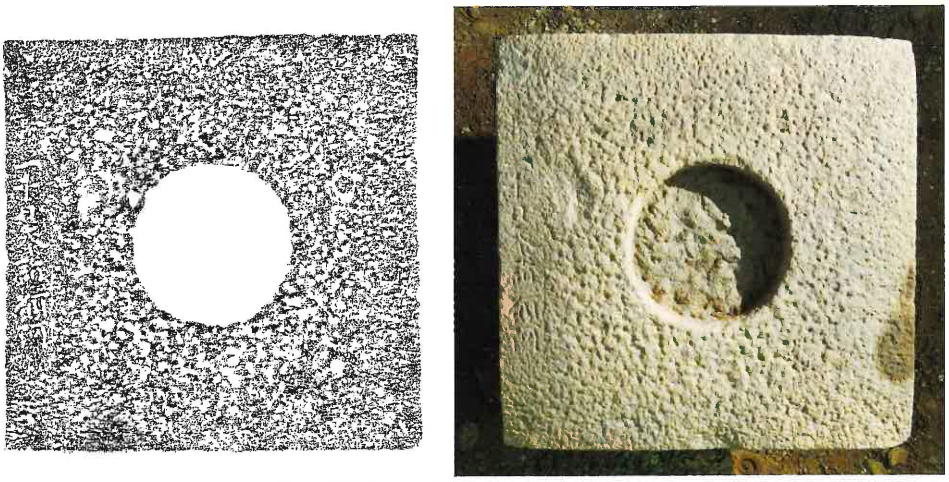

図２　願阿銘の五輪塔火輪　拓影及び写真

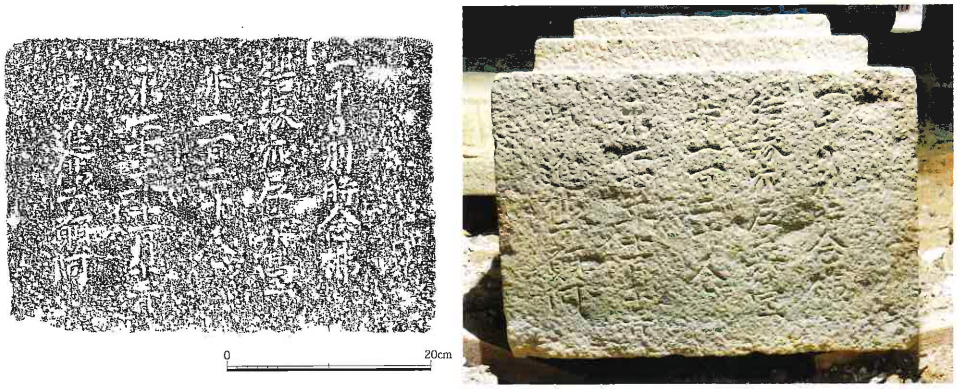

図３　願阿銘の宝篋印塔基礎　拓影及び写真

願阿という人

先の廿五三昧結衆やこの別時念仏結縁衆がどの地域の人々であったかは、銘文に記載がないので明らかではありません。しかし、その作善業を勧めた願阿はおそらく高野山の僧であり、各地へ出向いてこうした結縁による念仏の功徳を布教した高野聖の一人だったと想像されます。

中世の聖の実態を知るのはなかなか難しいことですが、石塔の銘文を読み解きながら少しずつでも彼らの活動を明らかにできたらと思っています。

【参考文献】
愛甲昇寛一九七八「高野山の五輪塔」『元興寺文化財研究所研究年報』元興寺文化財研究所
奥村隆彦二〇一四「臨死体験」『葬墓民俗用語集』アットワークス
川勝政太郎一九七八「勧進」「二十五三昧」『石造美術辞典』東京堂出版

「古絵図で巡る高野山探訪」（その十）

高野三山

◎外八葉・内八葉

高野山の地形は、周囲の外輪山を「外八葉」、その内側にある壇上伽藍を取り囲む内輪山を「内八葉」といい、高野山はその中央に位置し、蓮華の花弁に囲まれた清浄な場所であるとされます。

また、これら十六葉の峯々は両界曼荼羅の十六の仏さまに喩える考えもありますが、いずれにしても高野山が特別な「聖地」、仏の世界を立体的に表現した「立体曼荼羅」であることを意味しています。さらに周囲にある外八葉の峯々には、それぞれを結ぶ「女人道」が巡っています。

図1　『高野全山絵図』承応2年〈1653〉金剛峯寺蔵

◎高野三山

『高野全山絵図』（承応二年〈一六五三〉金剛峯寺蔵）には、弘法大師空海が入定する奥之院御廟、またその周囲には外八葉のうち、「転軸山（左）」、「楊柳山（中）」、「摩尼山（右）」が描かれています（図1）。これらの峯々は「高野三山」と呼ばれ、高野山を描いた多くの古絵図にも描かれていることから、信仰上、重要な山であることがわかります。

◎五輪塔の分布

同図には、転軸山と楊柳山の山頂部に五輪塔、摩尼山の山頂部には建物が描かれ（図2～4）、また同様に、その他の古絵図にも五輪塔や建物が描かれています（表1）。

実際に女人道を歩くと、高野三山の山頂部や沿道にも山内で見られるような一石五輪塔などの石造物が見られます（図5～10）。

このことから、これらの古絵図が描かれた十七世紀半ば以降には、高野三山の山頂部には五輪塔が祀られていたことがわかります。

表1 古絵図に見る高野三山山頂の構造物一覧

古絵図名称	年代	転軸山	楊柳山	摩尼山
『高野全山図（御公儀上一山図）』	正保3年（1647）	五輪塔	五輪塔	建物
『高野全山絵図』※今回掲載の絵図	承応2年（1653）	五輪塔	五輪塔	建物
『高野全山絵図（高野山絵図）』	万治元年（1658）	なし	五輪塔	建物
『奥院絵図』	宝永4年（1707）	建物	五輪塔	五輪塔
『高野山奥院総絵図』	寛政5年（1793）	建物	不明	建物

◎霊場・高野山

『霊宝館だより』126号、127号、129号では、奥之院地区と子院地区の墓や一石五輪塔などの石造物についてお話しました。これら山内の石造物は納骨信仰に伴って納められたものですが、その分布は高野三山や女人道沿いにも広がります。高野山の納骨霊場は、現在のように奥之院地区だけが中心地ではなく、かつては子院地区も含み、さらにその周囲の女人道をおおむね境界として、高野山全体が広い範囲で霊場として認識されていたことがわかりま

す（図11）。

現在、私たちが目にしている高野山の奥之院には、数十万基の五輪塔などの石造物が奉安されていると言われます。ですが、高野山奥之院地区と子院地区の墓地、また高野山全山の地下に埋蔵している石造物の数を加えると、その数は見当もつきません。

石造物の種類や規模、納められた時代、祀られた人の社会的立場は様々です。しかし、これら全てに共通することは、弘法大師空海が入定する高野山の地で、永遠の眠りに就きたいと切実に願う、篤い信仰心を持つ人々のものであるということです。

（鳥羽正剛）

図8　転軸山山頂　祠脇の五輪塔

図5　転軸山山頂　祠

図2　同図
転軸山山頂・五輪塔

図9　楊柳山山頂　祠前の五輪塔（水輪）

図6　楊柳山山頂　祠

図3　同図
楊柳山山頂・五輪塔

図10　摩尼山山頂　祠内の五輪塔

図7　摩尼山山頂　祠

図4　同図
摩尼山山頂・建物

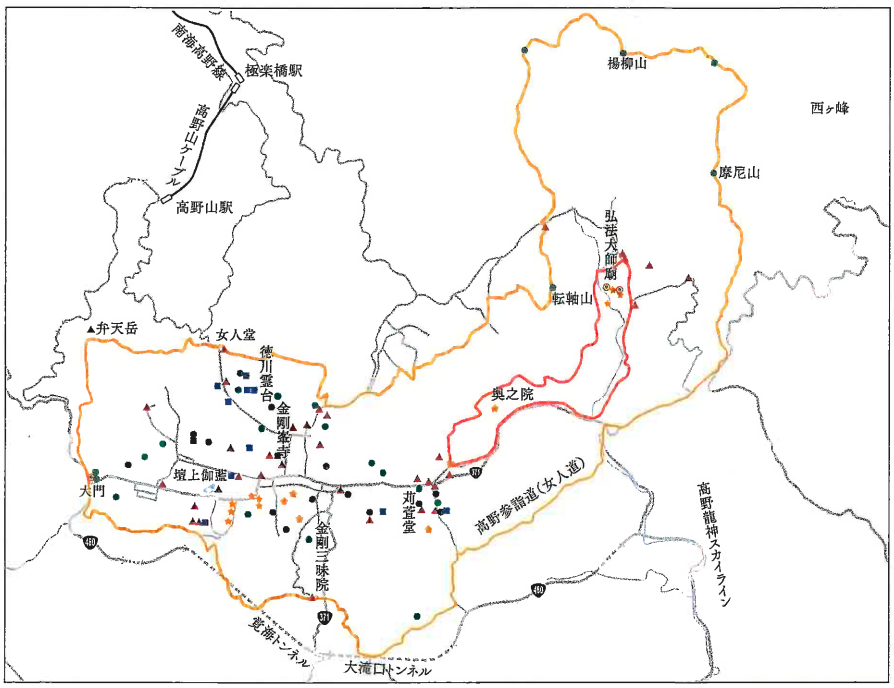

図11　高野山石造物分布図　「空海と高野山の至宝」展図録（2017）より転載

高野山霊宝館からのお知らせ

◎文化財防火デー

毎年1月26日の文化財防火デーに関連し、1月24日㈭に伽藍蓮池での放水訓練と啓発パレードが行われました。

◎霊宝館小宝蔵ほか修理完了

台風21号により破損していた霊宝館本館・小宝蔵の屋根と避雷針の修理が3月に完了しました。同じく被害に遭った重要文化財 奥院経蔵、同 上杉謙信霊屋の屋根の修理も3月に完了しています。

◎指定文化財 修理完了と展示の報告

重要文化財　十巻抄（鎌倉時代、円通寺蔵）のうち巻二・巻三の修理が完了し、3月より展示中です。（4月14日まで）

十巻抄　修理のようす

また、重要文化財 四天王立像（平安時代、金剛峯寺蔵）のうち持国天と増長天の修理も完了し、現在、本館にて展示中です。

修理の詳細は次号でご紹介いたします。

◎和歌山県内で仏像盗難多発

最近、和歌山県内で無住の寺院やお堂を中心として、仏像の盗難が頻発しています。文化財の盗難は人々の心の拠り所や、地域の歴史にとって大きな損失となります。施錠の徹底や定期的な巡視、不審者の声かけなど、地域での防犯対策を心がけていただきますようお願いいたします。

文化財の全体と部分写真の撮影や寸法・付属品・特徴を記録した台帳の作成も、万が一の際には重要な情報となります。

◎ご存じですか？霊宝館だよりバックナンバーが閲覧できます。

過去の「霊宝館だより」は霊宝館のホームページから閲覧・ダウンロードできます。トップページの「霊宝館だより」カテゴリ、あるいは次記アドレスよりご覧ください。

http://www.reihokan.or.jp/magazine/

※平成18年（2006）2月10日発行の第78号より。発行後、約1年以上経過したものを掲載しております。

ホームページ画面 イメージ

「霊宝館の庭園」休載のお知らせ

霊宝館だより84号（平成19年7月発行）より128号（平成30年10月発行）まで、11年にわたり連載しておりました「霊宝館の庭園」ですが、このたび休載することとなりました。

亀岡先生には45回、45種もの植物・樹木を通して、高野山の豊かな植生をご紹介いただきました。

霊宝館の庭園　掲載一覧

掲載号	名称	掲載号	名称	掲載号	名称
84	トチノキ	99	ノムラカエデ（ノムラモミジ）	114	シキミ
85	クルミ	100	リョウブ	115	カツラ
86	ヒイラギ	101	ヌルデ	116	サカキ
87	アジサイ	102	シャクナゲ	117	クロモジ
88	ザクロ	103	アカメガシワ	118	キハダ
89	サルスベリ	104	クサギ	119	キリ
90	トガサワラ	105	コウヤマキ	120	アケビ
91	イチイ	106	マツ	121	ヒメコウゾ
92	アオキ	107	スギ	122	ウワミズザクラ
93	ウバメガシ	108	ヒノキ	123	ネムノキ
94	ソヨゴ	109	ヤブツバキ	124	ガマズミ
95	ホオノキ	110	ヤマボウシ	125	マンサク
96	ノリウツギ	111	ナツツバキ	126	イヌツゲ
97	アセビ	112	クリ	127	ブナ
98	ケヤキ	113	イイギリ	128	カマツカ

◎友の会会員募集

- 会員証提示で会員本人のほか同伴者3名様まで霊宝館と金堂・大塔の拝観無料
- 年4回発行の機関誌「霊宝館だより」送付

〈年会費〉

一般会員（個人）　3、000円
一般会員（法人）　30、000円

皆様のご入会をお待ちしております。

お問い合せ先　高野山霊宝館　TEL 0736—56—2029㈹